1. 三郷市の概要

1. 沿革

弥生時代後期（2・3世紀頃）

中川左岸の上彦名から土器片が採集されており、この頃から集落が形成され農耕生活が定着したと考えられています。

古墳時代後期（6世紀頃）

中川低地周辺の古墳から発掘された石材や埴輪から河川を通じた南北交通の要衝であったことが推定されます。

江戸～明治時代

三郷市域の村々は幕府の家臣団や大名が配置されることなく、一貫して御料所（天領）として属し、幕末期の市域には、51を数える村が存在しました。

明治20年の町村制度の公布により、これらの村が彦成・早稲田・戸ヶ崎・八木郷の4ヶ村に統合されました。

昭和時代

昭和18年の戸ヶ崎村と八木郷村の合併を経て、昭和31年の町村合併促進法により、3ヶ村が合併し、現在の三郷村が誕生しました。更に昭和39年の町制施行を経て、昭和47年5月3日県下37番目として市政が施行されました。

江戸川緑領々地図より作成

（野田市立興風図書館蔵）

2. 位置と地勢

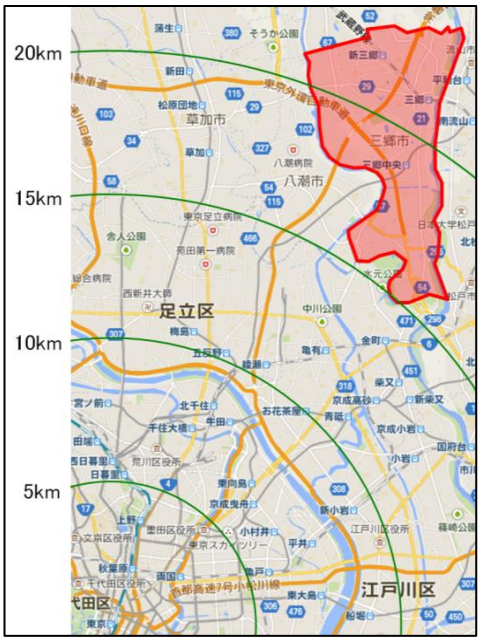
位置

埼玉県の東南端に位置し、東京都心から15～25kmの距離にあります。北は吉川市に接し、東は江戸川を隔てて千葉県（松戸市・流山市）に、南は小合溜井や大場川等を隔てて東京都葛飾区に、西は中川を隔てて草加市・八潮市にそれぞれ相対しています。

地勢

中川と江戸川にはさまれた沖積低地（中川低地）に属し、集落は、このような河川沿いの自然堤防の上に形成され、また、その間にある低地（後背湿地）は水田として利用されてきました。

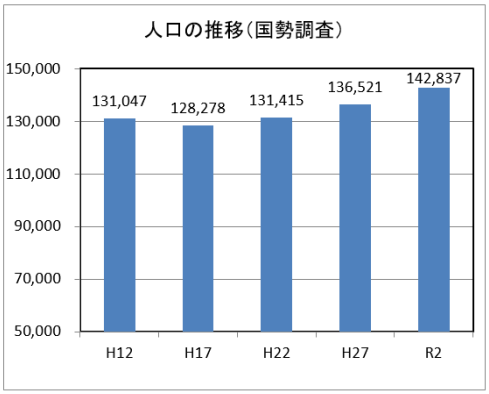
地形的には、ほぼ平坦な土地が形成されています。



3. 人口

三郷村が誕生した昭和３１年当時、わずか１．７万人だった人口は、町制施行以降、首都近郊の住宅都市として増加し続け、特にみさと団地の完成などにより３．６万人の増加が見られました。

その後は、平成７年の１３．３万人をピークに減少し、平成１６年には１３万人を割り込みましたが、平成１７年につくばエクスプレスの開業によって増加に転じ、令和７年４月１日現在では約１４.２万人となっております。

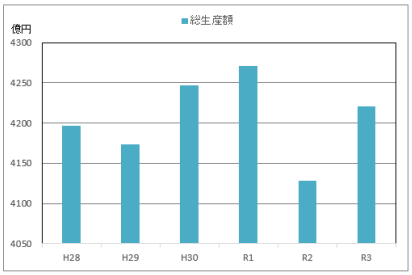


4. 産業

総生産

本市の総生産額は、増加傾向にありましたが、令和元年度から令和２年度にかけては減少に転じています。減少の主な要因は、新型コロナウイルス感染症の影響により、運輸・郵便業や宿泊・飲食サービス業などが減少したためです。

今後は、交通条件の優位性や都心部からの近接性を活かし、三郷インターチェンジ周辺や新三郷ららシティなどの都市基盤整備と共に、企業立地の促進や地域産業の育成が求められます。

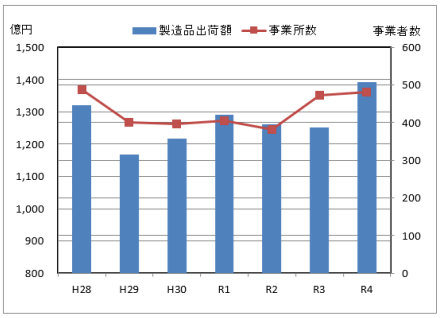


（埼玉県市町村民経済計算より）

工　業

本市の工業は、事業者数は減少傾向にありましたが、令和２年度から令和３年度にかけて増加傾向に転じています。なお、製造品出荷額については横ばいで推移しています。

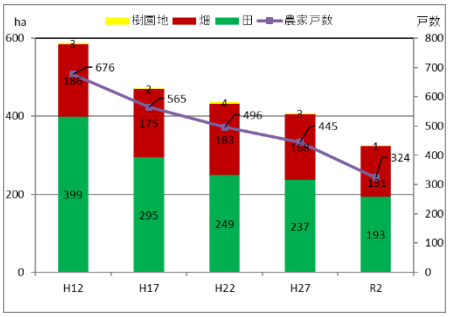
今後は、本市の交通利便性を活かし、産業集積を進めていき、流通・工業機能のさらなる発展を目指します。



※H27は調査未実施（工業統計調査・経済センサス活動調査より）

農　業

本市の農業は、都市化の影響と併せ、従事者の高齢化や担い手不足などから、農家戸数及び耕作面積ともに減少傾向が認められますが、小松菜・ネギ・ほうれん草などを中心に、農業生産が営まれています。 このため、田との比較において畑の減少率は低くなっており、アスパラガスをはじめ新特産品の研究にも活発に取り組まれていることなどから、東京に隣接した立地を活かした都市型農業のさらなる発展が期待されます。



（農林業センサスより）